

# 仏教思想に基づく『ハムレット』の解釈に関する試論 A Study on *Hamlet* from a Buddhistic Point of View

島崎 浩

SHIMAZAKI Hiroshi

The purpose of this paper is to show that it is possible to interpret *Hamlet* from a Buddhistic point of view, and to demonstrate that a basically similar philosophical thought concerning the below mentioned religious themes can be found both in Buddhism and in *Hamlet*. The themes are as follows: the inevitability of death, sin, repentance, salvation, the world after death, etc.

In *Hamlet*, the Queen and Claudius, in trying to ease Hamlet's grief over his father's death, refer to the fact that death is inevitable. The recognition of this fact seems to be the starting point of Buddhism as well as of the philosophical aspect of *Hamlet*. The scene in which Claudius confesses his sin and kneels in prayer may well remind a Buddhist of the teachings of Shinran (a Japanese Buddhist). He teaches that a man who has done wrong and repents for his deeds deserves the same religious salvation that a man who has done good deserves. Hamlet's final thought that the readiness for death is all, can also be found in Buddhism.

## 1. はじめに

『ハムレット』を仏教思想の観点から解釈するという発想を得たきっかけは、日本大学通信制大学院で上田邦義教授のシェイクスピア英語能に触れたことである。仏教に関わりの深いと思われる能とシェイクスピア劇が英語能という形で融合するのを目の当たりにした経験から、シェイクスピア作品を仏教思想に基づいて解釈することが可能ではないかと考えたのである。

シェイクスピア作品が時と場所を超える普遍性を持つことが以下のようにデイヴィッド M. バージェロン(David M. Bergeron)氏によって指摘されていることから、西欧文化の中に生まれたシェイクスピア作品に対する東洋の仏教思想からの解釈の可能性を探ることは意味のあることであると思われる。

まだまだシェイクスピア学には研究の余地が充分にある。最後の言葉はまだ語られてはいないのである。彼の芸術の美と神秘は、たとえ時と場所が互いに遠く隔たっていても、人々の知性と感情に絶えず訴え続け、刺激を与え続けることができる。ジョンソンが言ったように、シェイクスピアは「一時代の人ではなく、あらゆる時代に生きる人」なのである。<sup>1</sup>

また、坪内逍遙がシェイクスピアを日本人の心で解釈することの意味について次のように述べていることを森谷佐三郎氏が紹介していることも、日本人の多くに馴染みの深い仏教思想に基づいてシェイクスピア作品を解釈することの妥当性を裏付けるものである。

- 2) シェイクスピアは国境を超える世界的の詩人であるから、日本に移し植えることも不可能ではない。
- 3) シェイクスピアを日本人の心で別途に解釈することは、世界文芸上の一つの貢献である。<sup>2</sup>

## 2. 先行研究

岡本かの子氏が、『ハムレット』全体のストーリーの構造を、仏教思想の「実相平等因果差別」という考えに基づいて解釈して、次のように述べている。

何もかも因果応報づくめのこの芝居の中で、ハムレットだけには、骨折りばかりあって褒美の方が足りないようです。しかし、さすがは作者の沙翁、実は褒美は幕の外からハムレットに与えるようになっています。何かというと、見物の深い同情です。

以上で、この芝居は、外観には非常なもつれが行われて見えますが、中身は不増不減<sup>ふえずへらす</sup>で、よく収支決算がついています。そこがちょうど現実の縮図を見ることになるのです。この芝居の何となく、いつの時代でも人をひきつける力があるのは、そういうところから来ております。日本の忠臣蔵もおなじことです。

仏教の言葉で、これを「実相平等因果差別<sup>じっそうびょうどういんがしゃべつ</sup>」と言います。実相平等とは善因は善報を受け、悪因は悪報を受けて、ちゃんと割り切れるという、物事の实体方面で常に不増不減のところを指します。因果差別とは、物事の表面の現れ方で、一波万波を呼び、善悪相闘い、目まぐるしい凹凸のある方面を指します。<sup>3</sup>

これは、個々の台詞の中に読み取れる哲学を仏教思想との関連で分析しようとする本論考とは別の視点からの考察であり、『ハムレット』全体のストーリーを仏教思想に基づいて解釈する先行研究ではあるが、『ハムレット』の中で生起する諸事象の表面・外観に波乱や凹凸があっても、実体・中身は善因善報悪因悪報で不増不減であるという興味深い分析である。この論考は、『ハムレット』を仏教思想の視点で分析して捉えることが可能であることを裏付ける一例である。また、仏教思想に造詣の深い観客読者が仏教思想に基づいてシェイクスピア劇を解釈することがあり得ることを示す一例である。

### 3. 『ハムレット』の哲学的側面

『ハムレット』を哲学劇として解釈することも可能であることを、ヤン・コット (Jan Kott) 氏が次のように述べている。

『ハムレット』の内容をまとめるといわれたら、いろいろなやり方がある。歴史物語として、犯罪小説として、あるいは哲学劇としてまとめることもできる。結果は、どれもシェイクスピアの書いたものには違いないが、三つとも全く別の劇になるであろう。だが要約が偏ったものでなければ、三つの劇の台本は同じものになるはずである。違いはただ、それぞれに別のオフィーリアなりハムレットなりリアティーズなりが登場するというだけのことである。役は同じだが、演じる俳優が違うのだ。

4

『ハムレット』を純然たる復讐悲劇とは別の視点で捉えることが可能であることについては、小田島雄志氏も、「つまり、この劇のプロットは主要人物がみな死んでいく復讐悲劇です。だがこの劇のたたずまいというか、人物たちの行動や台詞が織りなす布地の肌ざわりは、人間とはなにか、と問いかける問題悲劇です。」<sup>5</sup>と述べている。

『ハムレット』全体を、先王である父の亡霊によりハムレットが命じられるクローディアスに対する復讐に関するストーリーはさておき、哲学劇、問題悲劇としての視点で概観すると、大きな柱は、

- 1) 死の不可避の認識、
- 2) 人生無常迅速の認識、
- 3) 人間の根源的な罪深さの認識、
- 4) 自己の罪深さを自覚する人間の懺悔と祈りによる罪苦からの救済の可能性の提示、

- 5) 死後の世界の存在への言及、
  - 6) より良き死後の世界へ行くための臨終の作法の提示、
  - 7) 大いなる存在による摂理の認識とその受け容れ、
  - 8) 終幕での摂理のはたらきによると思われる大団円、
- であると解釈できる。

#### 4. 『ハムレット』の哲学的側面と仏教思想

『ハムレット』の中の哲学的側面におけるこれらの大きな柱と内容的に類似するテーマは、仏教思想でもやはりまた扱われるところである。もちろん、例えば『ハムレット』における「天国」の概念と、仏教思想における「極楽浄土」、『ハムレット』における人格神による「摂理」の概念と、仏教思想における人格神を考えない中立的客観的な「因と縁による因果律」との違い、等はあるものの、『ハムレット』の中の哲学的なテーマと根源的なところで類似するテーマが仏教思想でも扱われると言えるであろう。

すなわち、『ハムレット』における「天国」と、それに対応する仏教思想の「極楽浄土」は、死後の至福の世界という点では類似し、『ハムレット』における「摂理」と、それにあたる意味で対応すると思われる仏教思想の「因と縁」は、個人の意思の範囲を超えた、この世のできごとの生成を支配する根本原理、という点では類似していると解釈できる。

キリスト教における天国と、仏教における極楽については、両者の間に異質性があるとともに、また、類似性が見られることが、次のように指摘されている。

天国(英Kingdom of Heaven, 独Himmelsreich)という概念は、聖書では「マタイによる福音書」だけにみられるものであり、一般には「神の国」(英Kingdom of God, 独Reich Gottes)とされる。・・・(中略)・・・神の国と極楽の両者は救済ということがモチーフの中心になっているともいえるが、神の国は支配という語が象徴しているように、神とユダヤ人、神と人間のきわめて人格性の強い関係から発想されたものである。これに対し極楽は仏が支配する場ではなく、その浄土に生まれ真の仏法を聞きその知恵を身につける場ととらえられるように、むしろ非人格性を基幹とした発想に立っているといえる。しかしその異質性を了解しながら、救済を願う人間の心情の次元から究明していく時、なんらかの類似性が見いだされ得ると考えられる。<sup>6</sup>

『ハムレット』の哲学的側面における、死の不可避の認識、人生の無常迅速の認識、人

間の罪深さの認識、罪悪深重を自覚しての懺悔と祈り、この世界の出来事の生成に関する自己の意志や思惑を超えるものの認識は、仏教思想の視点でも十分解釈可能である。

『ハムレット』において言及される、罪深さの自覚、死の不可避、死後の世界、というテーマが宗教的意識を生むことを、小坂国継氏が次のように指摘している。

われわれは自己の罪や業の深さを自覚すればするほど、また不可避的に迫りくる自己の死や来世について思いをめぐらせ始めぐらすほど、自己というものの存在や、その存在の在処や根源が問題となってくる。そしてまさしく、そこに、宗教的意識の起源があるといえるであろう。<sup>7</sup>

この意味で、『ハムレット』は宗教的意識の濃い劇であると解釈できる。そして、『ハムレット』の中で扱われていると解釈できる、罪深さの自覚、死の不可避、死後の世界というテーマは、洋の東西を問わず広く人間一般が考えることであり、本論考の考察対象である仏教思想でもやはり扱われるところである。したがって、そのような意味で、仏教思想に基づく『ハムレット』の解釈も一つの解釈として成立可能である。

『ハムレット』では、ハムレットが人間の根源的な罪深さを語る。そして、罪深い人間の具体的な姿と行動が登場人物達を通して描かれると同時に、その罪深さを自覚する人間の姿も描かれる。罪深い存在であると同時に、その罪深さを認識する良心をも併せ持つのが人間であり、そのために罪苦に苦しめられる。しかし、罪深き人間が同じ罪深き人間によって救われることはできない。そう考える時、人間を救うことができる、人間を超える大いなる存在、聖なる存在が考え出され、宗教が生まれるのであろう。

そして、自己の罪深さを自覚し、自力では到底その罪の苦しみから救われ得ない自己の無力さを認識して、大いなる存在、聖なる存在にすがろうとする心境になるまさにその時、その人間に罪苦からの救いの兆しが現れる、と考える宗教思想が存在する。その考え方は、キリスト教と仏教（特に浄土教）に共通する。

三幕三場のクローディアスが祈る場面では、自己の罪悪深重を痛烈に自覚し、その罪苦に対する自己の無力さを認識し、懺悔し、罪苦からの救済を謙虚にひたすら祈り求める人間の姿が描かれている。ハムレットに対する敵役の役割を担わされていると思えるクローディアスに、宗教的観点から救済に結びつくと思われるこのような場面を敢えて用意するシェイクスピアの意図は、何であろうか。あるいは、観客や読者はその場面から何を思うであろうか。

仏教思想に目を向けると、自己の罪深さを自覚する悪人こそが往生するとする親鸞の悪人正機説に従えば、この場面でのクローディアスこそがまさに救済の対象となる。仏教における次の「極悪人の自覚」は、三幕三場のこの祈る場面でのクローディアスの姿を思い出させる。

極悪人を自覚することは自力である。極悪人を自覚することで、徹底した他力本願が可能になる。なぜなら、極悪人と自覚したとき、人は、自分のもつ力はまったく無力で往生に適さないと知るからである。そうであれば、ひとえに阿弥陀仏にすがるほかはない。この自覚によって、すでに述べたように、人はその瞬間に救われることになる。それゆえ親鸞によれば、実際の念仏のことは、助けていただいた感謝の念として口にされるのである。つまり親鸞の考えでは、ナムアマダブツを口にすることで、助けられるのではない。むしろそれを口にしなければならぬ自分を知ることで、その瞬間において助けられるのである。そして、助けられて、そのことに気づいて、感謝の思いが念仏となって口にのぼる、というのが親鸞の信心なのである。<sup>8</sup>

## 5 . ハムレットの行動と仏教思想

仏教思想に基づいて『ハムレット』全体を概観すると、ハムレットの語る哲学的な内容に、白骨を目にすることから人生の無常迅速を認識すること、人間の根源的な罪深さを認識すること、いずれ必ず訪れる自己の死を迎える覚悟の重要性を語ることなど、仏教思想にも通じる多くの要素がある一方で、ハムレットの行動自体には、仏教精神と相容れない面も多い。

例えば、復讐のためにクローディアスを殺害することを考え、なおかつ、それだけでは満足せずに、クローディアスを地獄へ落とそうとさえ考えることなどは、全く仏教精神とは結びつかない。また、ポローニアスおよびローゼンクランツとギルデンスターンを死に至らしめたことについての自責の念が希薄であり、そのことは殺生を強く否定する仏教精神とは相容れない。三好弘氏は、ポローニアスおよびローゼンクランツとギルデンスターンを死に至らしめたハムレットについて、加害者意識が欠如しているとして、次のように痛烈な批判を述べている。

彼は間違っポローニアスを殺して自分が加害者になったとき、自分が悪いことをしたというよりも、相手がよけいなことをするからだという考え方をしている。これは自分の身代わりに死に追いや

ったローゼンクランツとギルデンスターンのときも同じである。そこには裁きの意識はあるが、自分が加害者になったという責めの意識はない。

もちろん、ローゼンクランツとギルデンスターンの場合は、ハムレットの手で直接殺したわけではないから責めの気持ちはないのかもしれないが、ポローニウスの場合は、自分の手で殺しているのである。その場では償いを後でするといっただけで、加害者の責めの意識はみられない。<sup>9</sup>

罪を自覚し救済を求めて祈る、敵役クロードディアスの姿に、むしろ仏教精神に通ずるものを見て取れる。

#### 6. 救済の可能性を読み取る仏教的解釈

シェイクスピアは、『ハムレット』や、『リア王』において、罪深き人間、罪を犯す人間、罪深さを自覚する人間、生老病死に苦しむ人間、不条理とも思える苦難に見舞われる人間の姿を克明に描いて観客に提示する。そして、その際のシェイクスピア自身の内心の作劇意図は確認できないとしても、観客読者がシェイクスピアの描くこのような悲劇の世界の中に、暗い絶望を乗り越える明るい救済のきざしへの方向性をも読み取る鑑賞の仕方が可能である。

仏教的に言えば、観客読者がシェイクスピア悲劇の中に、仏教によって求められる、修羅の世界から仏の世界への道を模索する鑑賞をすることも可能である。そう考えることにより、『ハムレット』の仏教的解釈、仏教思想に基づいての解釈が成立する。

そして、何が人間にとって苦しみからの救済であり得るかを考えると、

1) 『ハムレット』の中では、自己の死を含むこの世のすべてのできごとを神の摂理として受け容れる澄明な心境、仏教思想に置き換えて考えるとすれば、自己の死を含むすべてを過去から現在に至る無数の因と縁の相互作用による必然の結果として受け容れる達観した境地、

2) 自己の罪深さと、その罪苦からの救済に対する自己の無力を自覚して、大いなる存在にすべてお任せしてすがる謙虚なる祈り、

ということが、いくつか存在するであろう救済への道の中に含まれると考えられる。そして、『ハムレット』の中に1)と2)を読み取る仏教的解釈が可能と思われる。

1)に関連して、栗田勇氏により紹介されている良寛の次の考え方に、死に対する覚悟が表れている。

ところが一八二八年（文政十一）近くの三條<sup>さんじょう</sup>で大地震が起きました。良寛自身は無事でしたが、被害にあった友人の山田杜暲<sup>とこう</sup>に驚くべき書簡を出しています。

「災難<sup>あうじせつ</sup>に逢<sup>あ</sup>時節<sup>じせつ</sup>には災難に逢<sup>あ</sup>がよく候<sup>こう</sup>。死ぬ時節<sup>しんじせつ</sup>には死ぬがよく候<sup>こう</sup>。是<sup>これ</sup>はこれ災難をのがるる妙法<sup>みょうぼう</sup>にて候、かしこ」

すでに良寛は、運に任せてあるものをあるがままに受け入れ、生死を超えてひとり揚々と生きる境地に達していたのです。<sup>10</sup>

この、良寛による「死ぬ時節には死ぬがよく候」という考え方は、ハムレットの語る、“If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come. The readiness is all.” (V.ii.216-218)<sup>11</sup>（来るべきものはいま来ればあとには来ない。あとで来ないならばいま来るだろう、いまでなくても必ず来るものは来るのだ。なによりも覚悟が肝要。）<sup>12</sup>にまさしく対応するものである。

## 7. シェイクスピアの立場と観客読者

苦しみからの救済の可能性に関してシェイクスピア自身が何らかのある考えを持っていたとしても、シェイクスピアはそれを観客に直接断定的に提示するのではなく、可能性を示唆するだけにとどめ、観客に自ら考えるきっかけを提供しようとしていると思える。

シェイクスピアは自分の意見を観客に押し付けることを願わなかったとして、ブラッドレーが次のように述べている。

彼はこの「世俗的」な世界を最も熱心に又真面目に観察した。そして、自己の意見を押し付けることを願はず、又根本的には何人の希望にも恐怖にも顧慮するところなく、徹底した忠実さでそれを描いてある、と結論せざるを得ない。彼の偉大さは、異常な力量を持つ心の中に宿るこの忠実さに、主として基づいてある。<sup>13</sup>

齋藤勇氏は、シェイクスピアは人生の事実を忠実に描写して読者に提供して、その解釈は読者のめいめいに任せているのだとして、次のように述べている。

シェイクスピアは千変万化、融通無碍であるから、どこに彼の本音があるのか、何が彼自身の意見

であるのか、容易に見わけかねることがある。それだから、彼には思想がない、哲学がない、つまり彼は浅薄な大衆向の作者に過ぎないと罵倒するならば、彼はハムレットの言葉、

There are more things in heaven and earth, Horatio,  
Than are dreamt of in your philosophy. (*Hamlet*, I. v. 166f.)

ホレイショウ君、天地の間には、  
世間の哲学が夢想する以上のものがある。

という一句をもって、しっぺ返しをするかも知れない。実際、彼は、万代にわたって変わらない天地の理法や、時と共に移り所と共に変わる世のすがたを思っ、宇宙の大問題に対する人間の解釈のいかにはかないものであるかを認め、そして組織立った解決や系統的な学説も結局頼むに足りないことを考え、従って、自分は人生の生きた事実を諸君の面前に提供する、その解釈は読者が銘銘になさるがよい、この意味においても *as you like it* (お気に召すまま) である、という態度であったろう。彼はなまじ哲学者を気取ることをせず、警世の論客をもって自ら任ずることもせず、劇作者としての本分を事実の真相の報告と解釈とにあると信じていたのであるまいか。ここに彼の短所があるとも言えようけれども、我々は10年、20年、ないし30年、50年で無用となるような解決をつけてもらうよりも、事実によって問題を明らかにしてもらう方が望ましい。そして問題を明らかにすることは、解決に対する大きな要件である。<sup>14</sup>

同氏はまた同様の趣旨で次のように述べている。

シェイクスピアの人世観や社会観を述べる前に、もう一つの点を考えておかなければならない。それは彼が劇作家であり詩人であって、哲学者でも文学研究家でもなかったから、彼の思想をあからさまに述べもせず、また系統的に論じもしなかった、ということである。彼は近代の問題劇作家たちとはちがひ、特定の人世観や社会観をひっさげて、それを主張しまた実現するために創作したのではなく、人世のすがたを見つめてその実相を描き出し、その批判や解決は観劇者の自由にまかせたらしい。

15

このように、シェイクスピア作品の解釈は読者観劇者に任せられている。

シェイクスピアはこの世界を余すところなく忠実に描き、それを観客読者に提示する。一方、この世界における苦しみからの救済の可能性については、自己の意見を押し付けることをせず、観客読者に考える自由を与えているものと思われる。したがって、『ハムレッ

ト』を鑑賞する観客読者が仏教思想に基づいて救済の可能性について考えることも充分妥当なことであろう。

## 8. 最後に

シェイクスピア作品を仏教思想に基づいて解釈することを試みることにより、シェイクスピア作品と仏教思想という一見関連性のない地球上の東西の二つの文化に共通する領域が見い出され、宗教哲学における異文化間の接点が見い出されてくる。そして、そのことが、地球上の諸文化の間の相互理解を深めることを通して平和を目指す視点からも有意義であることを望むものである。

---

## 註

- 1 バージェロン, デイヴィッド M. 著、北川重男訳『シェイクスピアを学ぶ人のために 参考文献へのアプローチ』三修社、2001年、pp.38-39
- 2 森谷佐三郎『日本におけるシェイクスピア』八潮出版社、1986年、p.35
- 3 岡本かの子『仏教人生読本』中央公論社、2001年、pp.124-125
- 4 コット, ヤン著、蜂谷昭雄・喜志哲雄訳『シェイクスピアはわれらの同時代人』白水社、1974年、pp.69-70
- 5 小田島雄志『シェイクスピアの花咲く頃』晶文社、1980年、p.35
- 6 中村元監修『比較思想事典』東京書籍株式会社、2000年、p.377
- 7 小坂国継『善人がなぜ苦しむのか 倫理と宗教』勁草書房、1999年、p.220
- 8 八木雄二『イエスと親鸞』講談社、2002年、p.178
- 9 三好弘『シェイクスピアと日本人のこころ』公論社、1983年、p.76
- 10 栗田勇「子供と手まりをこよなく愛した日本人のあこがれ」『週刊朝日百科 仏教を歩く 良寛』朝日新聞社、2003年、p.7
- 11 Jenkins, Harold (ed.). *Hamlet, The Arden Shakespeare*. 1982. Thomas Nelson & Sons Ltd. 1997
- 12 小田島雄志訳『シェイクスピア全集 ハムレット』白水社、1998年
- 13 ブラッドレー著、中西信太郎訳『シェイクスピアの悲劇(上)』岩波書店、1982年、p.40
- 14 齋藤勇『齋藤勇著作集 第三巻 シェイクスピア』研究社、1975年、pp.456-457
- 15 同上、p.310